

【赤ちゃん観察—不在対象をめぐって】 (1980)

Martha Harris

ごく初期の頃から、すでに生後数週間にして —赤ちゃんが己れ自身とオツパイ、その口と乳首、それから己れ自身と母親とを区別し、それぞれ違うものであることに気づくや否や— ‘分離 separation’ という問題が観察されるようになります。赤ちゃんはどのようにして対象 object を己れ自身から引き離すのでしょうか、またそれは赤ちゃんの心の中で如何ように対処されるものなのでしょうか？赤ちゃんが実際に離乳されるずっと以前から、或る意味 ‘乳離れのプロセス weaning process’ というのは起きているわけで、或いはまたそうしたプロセスが頓挫することもあると言えます。それは母親とのあらゆる ‘分離’ を伴っております。これから語ろういたします赤ちゃんについて申しますと、それは ‘眼’ の活用でありまして、それがこうした ‘乳離れ’ にまつわる問題の或る側面を明らかにしていると考えられます。オブザーバー（観察者/observer）は、この男の子の発達を1年以上観察してきておりまして、彼が自分の眼を使ってさまざまに分離の事態に対処するのを知り、ひじょうに感銘を覚えたのであります。この赤ちゃんは、日本人の母親とオーストラリア人の父親との間に生まれた子どもです。彼ら両親は、一時的にロンドンに移住してきていたということです。観察者は赤ちゃんが産まれる前に母親に会っております。彼女はとても魅力的で、可愛らしい小柄な女性であり、赤ちゃんが産まれてくるのをとても待ち望んでおりました。しかしながら、実際のところ彼女は分娩において大変な難儀を経験いたしました。彼女は小柄でしたし、赤ちゃんはかなり大きな子だったからです。

観察者が母親を病院に訪ねたのは、赤ちゃん誕生の1日か2日後でありましたが、彼女は出産時のショックからまだ立ち直れず、ひどく内に籠もりがちで、観察者にまともに話しをするのも困難なほどでありました。赤ちゃんは誕生後の2日間保育器の中で過ごしております。病院の検査で、この子には些細ではあるものの、幾つか問題があるということが判明され、それがためその後1年間に亘って少しずつ治療が施されてゆきました。問題の事実を知らされる度、それは母親にとっては新たな衝撃でありました。彼の鎖骨にはひびが入っており、骨盤がほんの少し脱臼しているとの疑いがありました。また心臓に穴があり、それはいずれ12ヶ月目頃には閉じるとのことでした。母親は、当初はこうした全貌については知らずにおりましたわけですが、初回の訪問の際に観察者に、<私、赤ちゃんを抱っこできませんの・・>との憂げな調子で語っております。これはいくらか次の数ヶ月に亘ってのテーマともなった事柄であります。赤ちゃんが帰宅したとき、父親は2週間の育児休暇を取り、妻を世話したり、いろいろと手助けをしたのであります。赤ちゃんは母乳を与えられておりました。それから彼女の母親が日本から訪れ、2、3週間滞在いたしました。観察者はオツパイを与えられているときに赤ちゃんが肩をちよつと後ろへとグイとずらす仕草をする癖があるのを認めました。恰もピンと背筋を伸ばすみたいに・・。それはおそらく鎖骨に何らかの障りがあるせいだと思ふものの、その仕草の意味が何かに向かってなのかから遠ざかろうとしてなのか、彼女にはよくは解りませんでした。

赤ちゃんが6週目になる頃には祖母なる人は日本へ帰国してゆきました。やがて授乳は、赤ちゃんからは何ら殆ど目立った反応もなしに、ごく穏やかに母乳から哺乳瓶へと切り替えられていったのです。母親は明らかにそのことにいくら心苦しいものがあったようですが、それについては敢えて口にしたりしません。ただ私のオツパイ、お乳が出なくなったんですの・・>と簡単に言っただけでした。そして赤ちゃんは、母親に依ると、哺乳瓶のミルクをととても満足げに飲んでいました。が、観察者から見ると、泣き声をあげることの滅多にない子だということに気づきました。彼は実にもの静かな子どものようでした。ミルクは十分に飲んでおり、泣くことのない、そして概して万事うまく順応しているふうな印象でした。母親は、授乳を哺乳瓶に切り替えてからは、あまり彼を長く抱っこすることはしませんでした。授乳時間は短いものでした。しかし観察者は、これらの哺乳瓶で授乳されている間にも、赤ちゃんが目立って後ろへと振り向くことがあるのを認めました。それも今度は単に彼は後ろへと肩を引っ張るというのではなく、むしろ後ろを振り向いて辺りを見るという仕草をしたのです。彼女は、このとき、彼が振り向いて後ろを見るとき、それは恰も彼が或る意味何かしら経験を後ろへと、眼で追い遣ろうとしているといった感じを懐いたのです。しかし、彼は泣きませんでしたし、もしくはぐずったりもまるで致しませんし、あるいは母親に何ごとか彼を悩ますものがあるなど大っぴらに訴えるといったことも致しません。この時期、母親は彼女が子どもを出産する以前の快活さ、それが彼女の本来の性格のようでしたが、それを回復させておりました。彼女は彼のことをとても手の掛からない、育てやすい子どもであり、家族の日々の暮らしにすんなりと収まってくれていると語っております。彼女は見るからにととても芸術的才能の備わった女性であるようでしたから、赤ちゃんの着るものやら身の回りのものには随分と心を配っておりました。例えば、この家族は最初の頃、家具付きの住居に住んでおりましたが、彼女は、赤ちゃんが眼にするカーテンを敢えて変えたのです。その理由というのが、元々あったカーテンの色合いが全然美しくないということで、その記憶の痕跡がもしかしたら赤ちゃんの‘美的センス’を生涯に亘ってダメにするかもしれないと思ったからなのだそうです。彼女はまた、彼にごく早期の頃から、選り抜きのクラシック・ミュージックの曲を聞かせておりました。そのようにして彼の趣味がうまく育まれてゆくようにと大いに心掛けていたというわけです。母親は赤ちゃんについてあれやこれやと万事とても慎重に配慮を怠りません。しかし観察者は、あまり彼女が彼を抱っこしたり、あやしたりしないということに気づいておりました。彼女は彼によく話しかけはしました。彼が泣いたりすれば、彼女は彼のところへ行き、<何なの？どうしたの？(What's the matter, matter・・・)>といったふうに、ちょっと歌うように問い掛けを繰り返し、そのやさしげな、音楽的な響きに赤ちゃんは宥められて、どうやらそれで落ち着くかのようでありました。

さて、赤ちゃんが生後6ヶ月になり、哺乳瓶と同時にスプーンを使っての離乳食も導入されました。ここで観察者の眼には或る別のものが映るようになりました。母親は赤ちゃんにととてもよく調理された食事を与えていて、スプーンを使ってとてもきちんと上手に食べ物を与えておりました。彼はいつも与えられるものを何ら抵抗せず受け取ります。観察者は、彼に果たして抵抗するチャンスなどあるかしらと思ったぐらいです。何しろ母親はとても素早くそして手際もよくて、彼に食べ物を与えている間もあれこれよく話しかけて、いくら彼の気を逸らすふうだったからです。観察者はこの頃に或る別のことに気づきました。母親が部屋の中を動いたり、扉の外へいなくなったりするとき始終彼の眼は母親の

姿を追うことに気を奪われていたのです。そのようにして絶えず母親の背中を眼で追うことで、彼は常に母親が部屋のなかで何をしているのかを見ようとしていたのだと思われます。そして、キッチンへ行くのに扉の外へ彼女の姿が見えなくなったりしますと、母親が戻ってくるまでは、彼の眼はその扉に固定され、そのままどこかぼんやりと虚ろになっておりました。それから、戻ってきた母親に対しては、彼は少しばかりお母さんが再び現れたということを認める素振りをするものの、彼の反応は概してごくごく無言であったといえます。

この頃のこと、観察者にとって或るひどく動揺を来たす出来事が起きました。或る日のこと、赤ちゃんが生後6ヶ月の頃ですが、母親が彼女に、これから彼に入浴させますがご覧になれますかと訊いたのです。ところが赤ちゃんは入浴中ずうっと、涙を流してギャンギャンと狂ったように泣き喚いたのです。それは観察者にしても母親にしてもなんとも心を動揺させられる出来事でありました。母親はどうやら為す術を知らないといった感じでした。父親もまたこの場面に顔を覗かせていたのですが、両親共、この光景にはなんとも心穏やかではありませんでした。その後、彼らが観察者に語ったことは、赤ちゃんが動揺したのは、彼女が笑いもしないし、赤ちゃんを励ますようなことを何も言わないからではないかと考えたということでありました。つまり彼にしてみれば彼女はまったくの見知らぬ人であり、彼女が彼に全然親しみを感じさせないせいで彼女を怖がったのではなかったかというわけなのです。彼らはさらには彼女が彼ともっと一緒に遊んでくれたらとか、話しかけたりしてくれてはどうかと言うのでした。それは実に難しい局面でした。観察者にしてみれば、本当のところ事態はそのようにはまるで見えなかったからです。彼らは赤ちゃんが動揺したということで動揺を来たし、彼女を‘悪い対象 bad object’ にすることで幾らか一緒になって‘つるんだ’とも言えましょう。事実彼女はもう来ないでくれとも言われたのです。しかし彼女はさらに対話を推し進め、それでどうにか両親は気持ちを立て直してくれた模様であります。

こうした出来事は再び起こりはしませんでした。しかし観察者はこの時のことを振り返り、赤ちゃんが恐怖の大泣きを始める前に、彼が彼女を見たその瞬間のことを想起したのです。そのときの彼の目付きなのですが、もしも‘眼が人を殺す’ということがあったら、彼女は死んでいたに違いなからうと感じるほどだったというのです。その瞬間、彼女を見知らぬ人、そして侵入者として見做し、彼は彼女にありとあらゆるよろしくない厄介なものを投影し、そこで結果的に彼女は‘悪い母親 bad mother’になったのでありましょう。観察者はそのお宅には毎週定期的に観察に通っており、以前にも何回か赤ちゃんの入浴する場面に立ち会っております。確かにこの事態が起きる前の何週間かほどはそれをしておりませんでしたけれども…。この時に殊更母親が観察者に赤ちゃんの入浴をご覧になりたければどうぞと敢えて誘ったのは、赤ちゃんが入浴をととても喜ぶからということであったのです。赤ちゃんは観察者を毎週見てはおりましたが、彼は実際のところ彼女に対してなついた様子は一切見せず、微笑したりとか親しみを示すこともありませんでした。彼は横になって、彼女の顔を興味ありげに見ることはありましたが、でも決して打解けたふうではありませんでした。彼女はまた、或る意味彼はどうも著しく感情の表出をしない子どもだという印象を懐き始めていたのです。彼はどちらかというしばしばぼんやりとした虚ろなまなざししていることが多かったのです。また時々、こちらがもしかしたら彼が動揺したのではないか

と気掛かりに思うことがあったとしても、全然そのようではなく、代わりに彼の表情はただ虚ろで無感動のままにしか見えませんでした。

恰も赤ちゃんは、母親の中に、その生来の快活さを往々にして突き崩すような、脆さやら抑うつ感をどうやら感じ取っていたものと思われます。赤ちゃんの養育という点では彼女は完璧にやるべきことはやっていたわけで、そして祖国やら帰ってしまった実母のことを懐かしむ郷愁の思いもどうか気持ちの隅へと片付けてはいたでしょう。そして赤ちゃんの身体的ケアという機械的な動作に明け暮れしながら、そうすることで、心臓に穴があるといったことや、次々に明るみになる赤ちゃんのさまざまな身体的問題について心煩わせずに済ませようとしたかのようであります。母親は、観察者にそれらについて話すことはありましたが、概してそれはすぐさまにではなく、しばらく経ってから、どうかその事態についての情報を掌握できるようになった後になのであります。

おそらく、赤ちゃんのぼんやりとした虚ろな顔付きは、己れの内なる情緒をどう処理していいか解らないというわけで、それに焦点づけるよりはむしろわざと外してしまっていたのでしょう。この時期に彼が部屋を出てゆく母親の背中を追い続け、彼女が戻るまではその彼女の去った方をジッと眼を凝らして見ていることがしばしばあったのですが、それは或る別の事象へと進展しました。彼は彼女が部屋を出てゆくの眺めて、それから次には天井を見上げるのであります。時には彼は天井を指差すこともありました。それは恰も、彼の心の中に母親のイメージ (picture) があり、それを真上に、天井に据え置いたふうなのであります。こうした天井への執拗な興味は何週間もの間続きました。時には母親が部屋の中に一緒にいるときにもありましたし、時には彼女が部屋の外へ去った後にもありました。こうした事態においては、おそらく彼に幻覚が起きていたといえなくもないでしょう。

赤ちゃんが1歳近くなった頃には、這い這いもし始め、部屋中を動き回っておりました。この頃には観察者と両親とは、とくに母親ですが、とても親しく打解けておりました。母親は彼女の訪問を楽しみにしており、そして赤ちゃんを観察者にもっと関わらせようとも致しました。彼女は彼のことを観察者に話すようになりまして、また観察者の前で赤ちゃんに話しかけることも随分多くなったのです。それでも彼女は彼をあまり抱っこしませんでした。彼が這い這いしているときも、彼女の膝の上にお座りさせるということもしません。たとえそうしたとしても、ほんの一瞬であり、すぐさま床に彼を降ろしてしまします。観察者には、彼ら母子間にはかなり親密さとか親愛の情があるにはあるとしても、どうもそこには冷え冷えとした壁のようなものが立ちはだかっているように思えたのです。とてもお行儀が良く、また実によく抑制が利いているといった感じなのです。彼らは依然として同じ住居に住んでおりましたが、この頃には部屋中の家具のほとんど総てを新調しております。

この時期になりますと、赤ちゃんは随分と動き回ることが多くなりました。母親は彼のお気に入りの本をよく持ち出してきました。それは小さな絵本なのです。それから赤ちゃんはその絵本を手に掴み、それを開いて母親の方へと見せようとするのです。彼は幾つかの音を盛んに発することが出来るように

なり始めていました。それは、母親が発する何かのものの名まえに似ており、それを真似したのともいえます。こうした音遊びは彼にとってすごくお気に入りのゲームになっていました。観察者は、訪れた折に、彼が至極彼女に興味を抱いてくれるように感じ始めております。しばしば彼女を不思議そうな顔でまじまじと凝視するのです。それでも彼は彼女に話しかけようとする動きを示すことはありませんでした。観察者がお暇するとき、母親は赤ちゃんを腕に抱えて、彼に＜バイバイを言いなさい＞と言います。が、彼は決して＜バイバイ＞を言うことはなく、手を振ってさよならの仕草をすることもありません。彼は顔を背けてしまうか、もしくはちょっと哀しげな顔付きになるのであります。

そんな具合にして、彼がようやく1歳になる頃になって初めて彼は＜バイバイ＞と観察者に言うに至っております。この頃には確かに彼は随分と態度が親しみ深くなってきておりました。観察者が部屋に入ると、彼はベビーベッドの中に座っていて、彼女をとて親しげなふうに見上げます。彼は小さな積み木を手を持っていて、手を伸ばしてそれを彼女に手渡そうとします。彼がこのようなことをしたのは実に初めてでありました。しかしながら、彼女が手を差し出し、それを受け取ろうとしますと、彼はすぐさま手を引っ込めてしまい、その積み木を彼女に手渡そうとはしません。しかしその後の観察では、母親がやって来て、彼に話しかけそして食べ物を与えたあとに、彼はこの小さな玩具を掴んで、それを母親へあげようとしております。彼女はそれを受け取り、そしてそれを彼に返しました。それから今度は、彼は観察者の方を見遣って、その積み木を彼女に手渡そうとします。彼はそれを観察者に持たせたのです。そして彼女がそれを彼に返すと、彼は彼女からそれを受け取ります。それで観察者は、それをほんとうに彼との間の初めてともいえる相互交流 interaction として感じたのです。彼は、母親と観察者という二人と一緒にゲームをしたのがとても嬉しかったみたいでした。彼は一人を見て、それからもう一人を見て、それからなにやら頻りにお喋りするみたいに喃語で語りかけました。その一方で、一人からもう一人へと目線を動かし続けておりました。それから彼は天井を見上げ、指差しをしたのです。それはいつか以前彼が一人で、他の誰にも眼もくれずにやっていたのと同じでありました。彼は天井を指差し、そして天井に向かって話しかけておりました。恰も彼はそこに何かが見えるようでありました。それから彼は熱心な目付きで母親と観察者の方を振り向いたのです。明らかに、彼はそこに彼が見たものについて何ごとかを語ろうとしていたようであります。

観察者には、この彼のパフォーマンスは、母親がいなくなっちゃうこと (going away) に対する彼の情感が絡んでおり、その折に彼が心の内に懐いた何らかのイメージ (picture) が物語られていると感じられたのです。ここで私は、或る意味彼は母親と観察者を一つにしようとしていたのではないかと思うのです。恰も彼らが母親と父親とでもあるみたいに…。彼が‘不在対象 absent object’ について何ごとかを語っているといったふうに観察者が感じたことは、その観察の最後の辺りで確認されておりますようです。なぜなら、実に初めて、彼女がお暇するときに、彼はちょっと悲しげになり、でも手を振ってバイバイと言ったのですから…。彼は、観察者が来たり・いなくなったり (come and go) することに気持ちの上で折り合いをつけようとしたのではなかろうかと思われまふ。それは、彼の心の中では、母親が来たり・いなくなったり (come and go) することにどうにか甘んじようとする試みとも繋がります。それはまた、彼が

母親について或る種のイメージを心の内側に懐くことで、そうしたことを彼に可能にさせたということでもありましょう。こうしたことが出来るようになったのは、ようやく彼がほぼ1歳になる頃でありました。他の赤ちゃんの場合ですと、時として、それはもっとより早い時期に起こるともいえましょう。

※ 出典;【A baby observation : the absent object】(1980)

by Martha Harris

《 The Tavistock Model 》

Papers on child development and psychoanalytic training

by Martha Harris and Esther Bick,

edited by Meg Harris Williams, KARNAC 2011
